

現代日本語書き言葉における外来語造語成分について

小出 万莉子

(言語文化学部 英語専攻)

キーワード：外来語，造語成分，造語，合成語，接辞

0. はじめに

本稿では、現代日本語書き言葉における外来語造語成分について論じる。本稿における「外来語造語成分」とは、2.1.節でまとめる山下(2006)の定義した「造語成分」のうち外来語¹であるものを指す。本稿ではまず、日本語において造語に関与する外来語の成分について考察した先行研究を概観し、問題提起を行う。その後、外来語造語成分にはどのようなものがあるか、またその造語力はどの程度であるか、という問題について4つの調査を通して明らかにする。調査にはコーパスを用い、実際に造語成分によって作られた合成語の例を収集した。

なお、本稿における図表番号および下線等の装飾は特に断りのない限りすべて筆者によるものである。また、紙幅の都合上割愛した部分については適宜注で補足する。

1. 先行研究

本節では、卒業論文で参照した4つの先行研究のうち3つ²について概観する。まず、1.1.節で外来語形態素の性質について論じた森岡(1985)、1.2.節で外来語造語成分についてデータベースを作成し、調査を行った山下(2006)の順に要約する。最後に1.3.節で外来語由来の接辞が日本語の語彙体系に取り込まれる過程をモデルに示した村中(2014)について整理する。

1.1. 森岡(1985)

森岡(1985)は、日本語に取り入れられた外来語がどのように派生に関与しているかという問題について考察した研究である。まず、森岡(1985)における外来語形態素の分類に関する記述を以下に引用して示す。

語基 語の基幹をなす形態素で自立形式と結合形式とがある。一つの語基からなる語を単一語(例・スケート)、二つ以上の語基からなる語を合成語(例・アイス・スケート)という。

接辞 語基に付いて派生語を造る結合形式の形態素で、右に挙げた接頭辞・接尾辞がそれである。

屈折辞 語を屈折させて文の成分(文節)を造る形態素で、助辞類をいうが、外来語には存在しない。

(森岡 1985: 44 より引用)

¹ 本稿および卒業論文では、主に英語や欧米諸言語に由来する語を外来語と考える。

² 山下(1994)は紙幅の都合上割愛する。

森岡(1985)はこの分類について、日本人には「外来語形態素の語基と接辞との区別があまり、合成語と派生語³とフレーズ(句)の判定がつきにくい」(森岡 1985: 44)と述べている。その例として、「ハイライト」の「ハイ(high)」、「インドア」の「イン(in)」など、原語では形容詞や名詞、前置詞などであった形態素が日本人に接辞と意識されている場合を挙げている(森岡 1985: 45)。森岡(1985)はこのような形態素を「準接辞」と呼んでいる。

1.2. 山下(2006)

山下(2006)は、『造語成分データベース』⁴をもとに、外来語造語成分の特徴を分析した研究である。外来語造語成分とは、山下(2006)によれば「森岡(1985)の接辞と準接辞を合わせた広義の捉え方」を取ったものである。

なお、『造語成分データベース』には外来語造語成分が合計 393 個含まれており、山下(2006)はそれらについて分析を行っている。本稿と関連する部分は、①語構成上で合成語の前部分になるか後部分になるか(接続)⁵、②どのような特徴があるか(特徴)という点についての考察である。特に山下(2006)は②について、造語成分の中にそれ自体が省略語であるもの⁶が含まれることを指摘し、そのような成分が新たな語彙形成に関わる状況は外来語の存在感がより大きくなることを予想させるものであると結論付けている。

1.3. 村中(2014)

村中(2014)は、英語の接尾辞-like を由来とする外来語「ライク」の通時的な使用実態を新聞コーパス等で調査した研究である。その結果を受け、村中(2014)は「ライク」が接辞として意識され日本語の語構成体系に取り込まれていく過程を「ライクの形態変化のプロセス」(村中 2014: 81)として仮説的モデルに示している。以下にその図式を引用する。

³ 一般に、語基どうしによる造語プロセスを「複合」、語基と接辞による造語プロセスを「派生」というが、森岡(1985)における「合成語」は一般にいう複合語を指すものと思われる。ただし、この引用部分のような理由から、森岡(1985)では厳密な複合と派生の区別が行われておらず、後述する「準接辞」による造語も含めて「派生」と呼んでいるようである。

⁴ 山下(2006)を含む「現代日本語の語構成研究」の一環として作成されたもので、9種の資料から造語成分を収集したデータベースである。資料の内訳は、7種類の国語辞典、『分類語彙表増補改訂版』(2004)の索引ファイル、『日本語能力試験出題基準改訂版』(2002)の語彙表ファイルの計9点である。収集の基準は、国語辞典においては見出し語に「造語成分」または「接辞」と記載されているもの、他の2ファイルについては「-」の付されている語としている。収録語数 5,149 語のうち、語種別の造語成分の内訳は漢語 3,719(72.2%)、和語 1,012(19.7%)、外来語 393(7.7%)、混種語 25(0.5%)である。(以上、山下 2006: 99 を要約)

⁵ 例えば、合成語「あい-はげむ」における「あい」は前部分、「話し-合う」における「合う」は後部分になっていると見なし、山下(2006)はこれを前後それぞれに「接続する」と呼んでいる。したがって、造語成分「あい」は「前接」、「合う」は「後接」と分類される。「アイ-マスク」「カメラ-アイ」のように前後両方になりうるものは「前後接」と呼ばれる。なお、外来語造語成分は「前接」の成分が 393 個中 271 個(69.0%)と大部分を占める(以上、山下 2006: 107 を要約)。

⁶ 詳しくは 4.4 節「追加調査」の注を参照。

英語 like 英語(例: Silk-like Polyester)・・・英語

↓

【プロセス A】カタカナ語ライクカタカナ語・・・音声及び表記の日本語化

(例: シルクライクポリエステル)

【プロセス B】カタカナ語ライク漢語/和語・・・語彙的な日本語化

(例: シルクライク合成繊維、シルクライク織物)

【プロセス C】カタカナ語ライクなカタカナ語・・・文法的な日本語化

(例: シルクライクなポリエステル、ガラスライクなプラスチック)

【プロセス C'】カタカナ語ライクな漢語/和語/混種語・・・文法的(および語彙的)な日本語化

(例: シルクライクな繊維、ドナーライクなふるまい)

【プロセス D】漢語/和語/混種語ライクな全ての語種・・・語彙的および文法的な日本語化

(例: 地下鉄ライクな一般鉄道、写真ライクな高画質画像)

(村中 2014: 81-82 より引用、記号や装飾はすべて村中 2014 による)

最後に村中(2014)は、本稿でも参照した森岡(1985)の「外来語は漢語と異り、語を構成要素である形態素に分解しないで受け入れることが多いため、日本語の造語要素として機能する外来語の接辞は極めて限られてくる」(森岡 1985: 52)という記述を引いて、「ライク」はその限られたうちの 1 つといえると述べている。

2. 先行研究のまとめと問題提起

森岡(1985)によって、外来語には、狭義の接辞以外にも造語に関与しうる要素があることが述べられ、山下(1994)および山下(2006)のデータベースの作成と調査によって、それら「造語成分」に具体的にどのようなものがあるかが明確にされている。さらに、村中(2014)による「ライク」の日本語化プロセスを示したモデルは、ある造語成分が他の語と結びついて造語力を発揮するようになる過程であるとも考えられる。したがって、接続する語の語種に着目することで、造語力の高さが検討できるのではないかと考える。

加えて、本稿が参照したすべての先行研究は、外来語の造語力は限定的であるという立場をとっていたが、辞書調査や内省による用例の列挙だけでなくコーパスを用いた調査を行うことで、より実態に近い造語力の検討ができると筆者は考える。

3. 本稿における「造語」の定義

本稿では、先行研究のうち特に森岡(1985)を踏まえ、一般にいう複合と派生の両方を合わせた現象を「造語」とみなし、作られた語を森岡(1985)に倣って「合成語」と呼ぶ⁷。なお、合成語の成立について、本稿では複数の成分に分解可能な造語結果としての語を合成語として扱い、合成語 1 語の形で外国語から借用されたのか、日本語に取り入れられてから複数の形態素によって形成されたのかという過程は考慮に入れないこととする。

⁷ 理由として、合成語の形成に関わる「造語成分」自体が語基とも接辞とも結論付けられず、複合と派生を完全に区別しがたいという点があげられる。

4. 調査

4.節では、調査資料として用いたコーパスの概要(4.0.節)を示した後、卒業論文に係る4つの調査についてまとめ、それぞれの結果の一部⁸を示す。まず予備調査(4.1.節)・調査Ⅰ(4.2.節)では造語成分による合成語の例を集め、村中(2014)の図式を参考に造語成分に接続する語の語種について分析した。続いて調査Ⅱ(4.3.節)では調査Ⅰで得た用例の異なり語分析を行ったほか、追加調査(4.4.節)では省略語由来の成分についてさらに例を収集した。

4.0. 調査資料

調査には、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese、以下 BCCWJ)および、その検索アプリケーションである「少納言」と「中納言」を使用した。BCCWJ は国立国語研究所を中心に開発された現代日本語書き言葉の大規模均衡コーパスで、規模は約1億語である(前川 2015)。「中納言」のデータには語種や品詞などの形態論情報が単位⁹ごとに付されている(小椋・富士池 2015)。

4.1. 予備調査

予備調査として、山下(2006)の『造語成分データベース』に含まれる393の造語成分のうち、小西・南出(2001)および北原(2010)の電子辞書版(以下それぞれ『ジーニアス』、『明鏡』)で「英語由来の接辞」と判断できるもの¹⁰について、BCCWJ「少納言」を用いて和製語¹¹の用例を収集した。さらに、接続する成分の語種と品詞を『ジーニアス』『明鏡』で判断し、それぞれの造語成分が何種類の語種・品詞と接続したか¹²を数えた。例えば、造語成分「スーパー」による和製語の用例「スーパー林道」の場合、「接続する成分」とは「林道」を指し、語種は【漢語・和語】と判定する。なお、紙幅の都合上本稿では結論に関係する語種の結果のみを図にして示す。

⁸ 卒業論文本体における「接続する成分の品詞」にかかわる調査結果(調査2)は紙幅の都合上割愛する。

⁹ BCCWJにおける「語」の規定には「短単位」と「長単位」の2種類がある。例えば、「ヒンディー語」という文字列は短単位では「ヒンディー」語」と2単位に分割され、長単位では「ヒンディー語」と複合語1単位に認定される。(以上、小椋・富士池 2015を要約)詳しくは小椋・富士池(2015)を参照されたい。

¹⁰ 調査を行った接辞は以下のとおりである。内訳は接頭辞18、接尾辞8の合計26個である。なお、この他に「イン(in-)」も接辞と判断したが、前置詞inと接頭辞in-の用例上の区別が「少納言」では困難であり、予備調査の対象からは外すこととした。

ウルトラ(ultra-)、アンチ(anti-)、スーパー(super-)、セミ(semi-)、ポスト(post-)、プレ(pre-)、センチ(centi-)、アウト(out-)、サブ(sub-)、アンダー(under-)、デシ(dec-)、ハイパー(hyper-)、インター(inter-)、カウンター(counter-)、メタ(meta-)、フェムト(femto-)、ノン(non-)、ミニ(mini-)、チック(-tic)、レス(-less)、エード(-ade)、イズム/ズム(-ism/-zm)、ナイズ(-nize)、ロジー(-logy)、ティーン(-teen)、プルーフ(-proof)

¹¹ 予備調査のみ、合成語の成り立ちを調査したうえで、日本語に取り入れられてから合成語となった「和製語」の例のみを収集していることに注意されたい。「和製語」でないとして除外する際の基準は以下の3点である。a)『ジーニアス』に見出し語として立項されている、b)出典から、外国語作品の翻訳と思われる、c)専門用語や商標については、google検索の結果、オンライン辞書に立項されていたり学術的文献に使用されていたりするなど、広く英語として使われていることがわかる

¹² 何種類の語種と接続したかということを示す数を本発表では「語種数」と呼ぶ。予備調査では、語種を【漢語・和語】【外来語】【和製語】【混種語】【その他】の5種類に分類した。

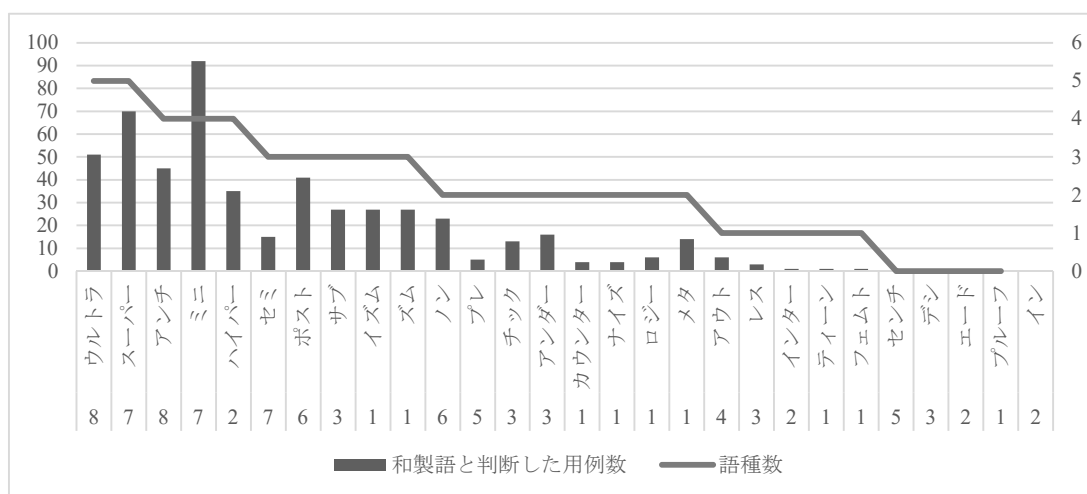


図 1: 接続する成分の語種と和製語用例数の関係¹³

図 1 より、接続する語種の幅が広い(図中の「語種数」が多い)ほど、和製語の用例数も多い傾向にあることが分かる。

なお、造語成分「ミニ」は、図中で全体の傾向に対し用例数が特に多く(図中の縦棒が周辺の造語成分に比べ高く)なっている。「ミニ」は、「漢語・和語と結びつく数(全用例 92 件中 40 件[43.5%])が外来語と結びつく数(38 件[41.3%])より多い」「和製語や混種語などと結びつく例が多い(同じく 92 件中各 8 件[8.7%]、6 件[6.5%])」というほかの成分にない 2 つの特徴を持っており、このことが用例数の増加につながったと考える。

4.2. 調査 I

調査 I は、予備調査とおおむね同様の手法で行った。変更点は、BCCWJ「中納言」を用いて語種の判断を形態論情報によって行ったこと¹⁴、調査する成分を接辞だけでなく造語成分全体に広げたことの 2 点である。なお、用例数が多く造語力が高いと予想する成分と、用例数が少なく造語力が低いと予想する成分とで比較するため、調査には単純に BCCWJ 上の検索ヒット数が多い成分群(以下グループ A、計 38 個)と少ない成分群(以下グループ B、計 37 個)の 2 グループ¹⁵を形成して別に調査を行った。以下図 2 に結果を示す。

¹³ なお、図 1 中で横軸の各造語成分に付された数字は山下(2006)の『造語成分データベース』における「頻度」(山下(2006)がデータベース作成に使用した資料 9 種のうち、何種類に「造語成分」または「接辞」として立項されていたかを示す数値)である。

¹⁴ 語種は「中納言」の分類に従い、【漢語】【和語】【外来語】の 3 種である。

¹⁵ 調査した造語成分は以下のとおり。まず、山下(2006)が示した 393 個の外来語造語成分から検索ヒット数によって 50 成分ごとに 2 グループを形成した。ただし、うち「後接」である成分は「接続する成分」の判定に統一した基準を設けることが困難だった(例えば、「フェラーリ専門ショップ」を「フェラーリ専門+ショップ」と分析するか、「専門+ショップ」と分析するかという問題について判断基準を確定できなかった)ため、最終的に調査を行ったのは「前接」および「前後接」の成分のみとした。よって調査を行ったのは、グループ A から「後接」12 成分、グループ B から同様に 13 成分を除いた一覧である。成分の詳細は図 2 の横軸を参照。左端から「◇グラス」までがグループ A、「◆ウイニング」から右端までがグループ B である。

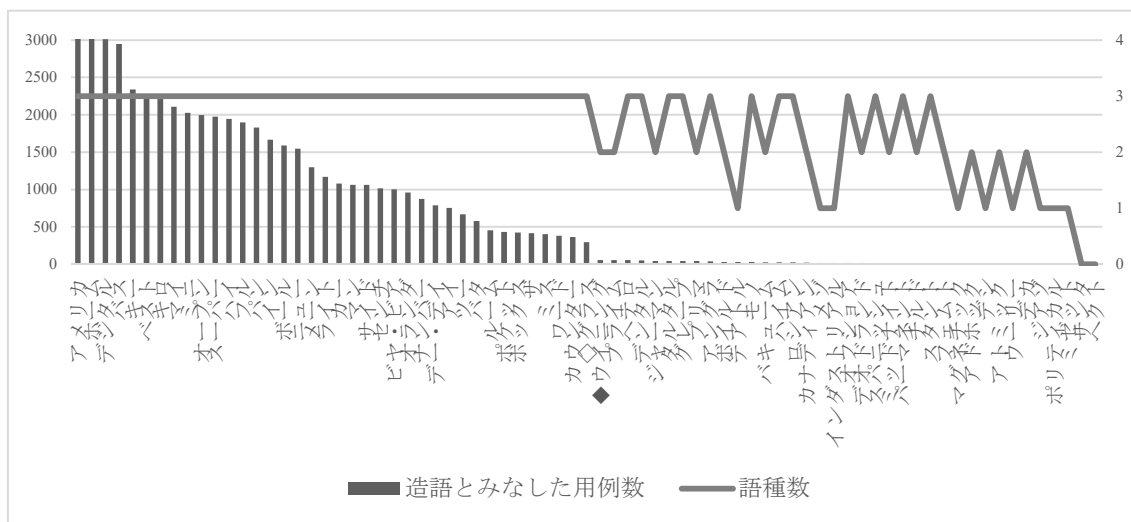


図2: 接続する成分の語種と合成語用例数の関係¹⁶

図より、グループ A、すなわち合成語用例数が多いほうの成分は、3種類すべての語種と接続する傾向が見て取れる。用例数が少なくなるにしたがって、語種数は成分によってばらつきがみられるようになり、全体の傾向としては語種の幅が狭くなっていくこともわかる。この傾向は予備調査で得た結果(図1参照)と一致するものである。

全体的に各造語成分は外来語と接続する用例が最も多い傾向にあった一方、漢語・和語との接続が多い成分も見られ、接続しやすい語種には造語成分ごとの特徴が表れると考える。その例としては、和語の接続が最も多かった「オープン」が挙げられる。「オープン」は「オープンする」の形やその活用形が和語の例の大半を占め、サ変動詞化という他の造語成分には多くない特徴を持っていると推測できる。

4.3. 調査Ⅱ

調査Iで得た合成語用例について、異なり語で分析を行った。具体的には用例の延べ数に対する異なり数の比率を算出(異なり数÷延べ数)し、合成語の多様性を示す簡易的指標として用いた。詳細な数値等は紙幅の都合上割愛するが、上述の比率が比較的高い造語成分の特徴について、以下のように整理することができた。

a)造語成分が複数の用法を持つ(複数の異なる原語が元になっている成分である)

例: ミニ(mini- / mini(skirt))、スーパー(super- / super(market))など

b)省略語由来の成分である

例: アングラ(「アングラ経済」、「アングラもの」など多様な合成語が見られる)

¹⁶ 用例数が3,000件を超えた「アメリカ」「ホーム」「デジタル」は紙幅の都合上縦棒の上部を省略した。

4.4. 追加調査

4.3.節の b)に挙げた省略語由来の成分の特徴に着目し、山下(2006)で例として挙げられていた省略語由来の造語成分¹⁷について追加調査を行った。追加調査では BCCWJ「中納言」を使用し、長単位1単位と認定されることをもって合成語であるとの判断を行った。得られた合成語例の一部を以下表1にまとめる。

表1: 省略語由来の造語成分による合成語の例(一部抜粋)

造語成分 ¹⁸	用例
サラ	脱サラ、クレサラ、卒サラする
ドラ	連ドラ、昼ドラ、朝ドラ
コン	パソコン、シネコン、ブラコン、Kinki コン

表に挙げたとおり、「クレ(ジット)+サラ」「連(続)+ドラ」「シネ(マ)+コン」など、接続する成分にも省略語をとる例が多くみられた。加えて、「コンサート」に由来する「コン」については、「非省略形+コン」である「Kinki Kids コン(1例)」に対し「省略形+コン」である「Kinki コン(2例)、キンキコン(3例)」の用例数が上回る結果を得た。

5. 考察

調査Iで明らかになったように、より多くの語種と接続する接辞ほど和製語の用例も多いことから、そのような接辞の造語力は高いといえる。さらに調査IIでは接辞に限らず、造語成分一般においても同じことがいえるとわかった。ある造語成分が最も接続しやすい語種は外来語が多い一方、漢語や和語と積極的に接続する成分があることも明らかになった。追加調査では、省略語由来の成分がさらに別の省略語と接続しやすい傾向にあることも判明した。したがって、調査結果を総合すると、造語力が高いといえる成分の特徴を以下のように整理することができる。

- 1A. サ変動詞化などが可能である(例: オープン) / 1B. 外来語以外の語種と接続する例が多い(例: ミニ)
 1C. 合成語内部の関係が連体修飾関係だけでなく、連用修飾関係の例が可能である¹⁹ / 2A. 原語で複数の別語であったものが、1造語成分として同一表記になっている / 2B. 造語成分が省略語に由来する

¹⁷ 山下(2006)が論文中に示した(本稿では割愛)アルファベット略語の「イー」「アールエイチ」と、省略語由来の成分「アメ」「ングラ」「エコ」「オート」「コン」「サラ」「タク」「テク」「テレ」「トラ」「ドラ」「パイ」「パン」「ポリ」を合わせた16の造語成分。山下(2006)では「マージャン」の省略語である「ジャン」も挙げられているが、0.節で断った通り本稿では中国から入った語は外来語と見なさない。

¹⁸ 表中の造語成分はそれぞれ、「サラリーマン」「ドラマ」「コンピューター / コンプレックス(2例) / コンサート」に由来する省略語である。なお、造語成分「コン」については上述の他に「コントロール」「コンパクト」に由来するものなど文脈から判断できるものだけで21種類の原語がみられた。

¹⁹ 本稿では紙幅の都合上割愛した、2つ目の予備調査において明らかになった内容である。造語成分「ウルトラ」について「中納言」で検索したところ、「ウルトラハッピー」「ウルトラかわゆす」など合成語内部が「ウルトラ」による連用修飾関係である例が得られた。調査Iでは接続する品詞についても調査したが、他の成分にはこのような連用修飾の例はほぼ見られなかったこと、造語成分「ウルトラ」は調査Iの結果より造語力が高いとみられることの2点から、考察において取り上げることとした。

なかでも語種に関わる特徴(1B)は、造語力に大きく貢献するものとする。なぜなら、漢語、和語、混種語とも接続する造語成分は、村中(2014)のモデルと照らし合わせて考えれば、プロセスの最終段階である「語彙的および文法的な日本語化」(村中 2014: 81-82 より引用)の段階まで到達しているということになる。さらに、村中(2014)では示されていないが、省略語と接続しやすい省略語由来の造語成分は、村中(2014)のプロセス D と同等もしくはさらに先の段階まで日本語化が進んでいるのではないかと思う。なぜなら、省略語それ自体は元が外来語であっても、日本語の音節に従って作られたもので、漢語・和語など日本語の固有語と並んで高度に日本語的な成分であると考えられるからである。

6. 結論

本稿では、外来語で造語に関与する成分として山下(2006)の「造語成分」に注目し、コーパスで実際の使用例を収集することで、その造語力の検討と特徴の分析を行った。

結論としてまず、「より多くの語種・品詞と接続して合成語を作ることができる造語成分ほど、造語力も高い」と筆者は考える。このような合成語の例は、村中(2014)における日本語化プロセスの最終段階に相当し、さらに BCCWJ における用例数も多いことから、この結論を明確に裏付けることができる。

以上は先行研究と一致する結果であるが、さらに、「造語成分は成分ごとに異なる特徴を示し、それらが造語力に影響している」ことを新たな分析結果として付け加えたい。なかでも省略語由来の成分は、さらに別の省略語と接続して合成語を作る例が多くみられた。数ある造語成分の中でも、特に省略語由来の造語成分は今後もさらに合成語を増やしていくと筆者は考える。外来語造語成分は現代日本語において確かに語彙の生産に寄与しており、それらが今後も造語力を発揮していくことは十分に期待できるだろう。

参考文献・参考資料

ネット上の PDF 資料については、章の名前を《》で、文書の名前を「」で囲んで示す。
小西友七・南出康世(編)(2001)『ジーニアス英和大辞典』東京:大修館書店。/ 北原康夫(編)(2010)『明鏡国語辞典 第二版』東京:大修館書店。/ 村中淑子(2014)「外来語接尾辞『ライク』」『国際文化論集』49: 67-88. 桃山学院大学。/ 森岡健二(1985)「外来語の派生語彙」『日本語学』4. 東京: 明治書院。/ 山下喜代(1994)「語の構成要素: 国語辞典における「造語成分」について」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』6: 71-102. 早稲田大学。/ _____(2006)「現代日本語の語構成要素: 外来語を中心に」『紀要』48. 95-110. 青山学院大学文学部。/ 「現代書き言葉均衡コーパス(通常版)BCCWJ-NT」<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search> (2016/6/5) / 小椋秀樹・富士池優美(2015)《第5章形態論情報》『現代日本語書き言葉均衡コーパス』利用の手引 第1.1版 58-91。/ 前川喜久雄(2015)《第1章『現代日本語書き言葉均衡コーパス』入門》『現代日本語書き言葉均衡コーパス』利用の手引 第1.1版 1-18。